

## 第1回「ECのポスターの絵を描いているのはどんな人？」 真砂秀朗さんを葉山のアトリエに訪ねる



今年のビジュアルを描かれるときには、んなイメージがあつたんですか。

今年は十年目だし、そういうひとつひとつの要素が一個の輪になるといふか、もう回ゼロになるといふか。太陽みたいなイメージがすごくありましたね。

絵のスタイルは、岩絵とかペトログリフといわれているものです。遺跡などで岩に彫つてある絵がありますよね。表面の焼けしている石を別の石でちよつと彫ると、中が白くて線画になるんです。これは世界共通なんです。それを集めて比較研究している学問が出てきて、それが単なる絵じゃなくて、一つ一つ共通性の中で意味があるつていうことが段々分かってきたんですね。今、アフリカとかインディアンとかケルトとか呼んでいるけれども、それらを区別した言葉さえもなかった当時は、その人たちつていうのはその長い中で海も渡り、陸も渡り、動き回っていたわけですよ。こうグルグル、グルグルつてね。回りながらマーキングしていったわけですよ。だから日本のもものとインディアンのものが同じだったりとか。ある意味では文化としてまだ分かれてない時代の文化だったんだよね。逆に今、凄く細分化してしまつた中で、もう一

回すごく過去のものがシンボライズされてくるんじゃないかな。そういう意味合いを込めているんですけれどね。それから三歳位までの子供つてああいふペトログリフ的な絵を描くんですよ、要素的に。人間が成長して多様性の中に入る前の観点つていふか。

☆真砂さんのビジュアルワークは、祭に向けて漂っている空気を物質化していただいているという感があります。これまで八回そうした作業を続けてこられたわけですが、

★一年一年で区切つて一つのシンボルとか、デザインとか出てくるじゃないですか。地球を抱えている人があつたりとか、天使だつたりとか洞窟の中の人だつたりとか、毎年自分の中に生まれているんだけれど、それは皆で共有しているものだと思うんです。そういうものを八年やつて、アリス・セレブレーション十周年を機に一つにまとめてみたいなど思っているんですけれど。

☆今回のECでは個展を開かれますね。

★シルクスクリーンの版画で、八年経つているとメインビジュアル以外にもいろいろいなサインが生みだされていくじゃない？ それをもう一回再構成して版画にしてみたいなとすごく思い始めていて、アリス・セレブレーションも十年目だし、すごくいい機会だと思つて。

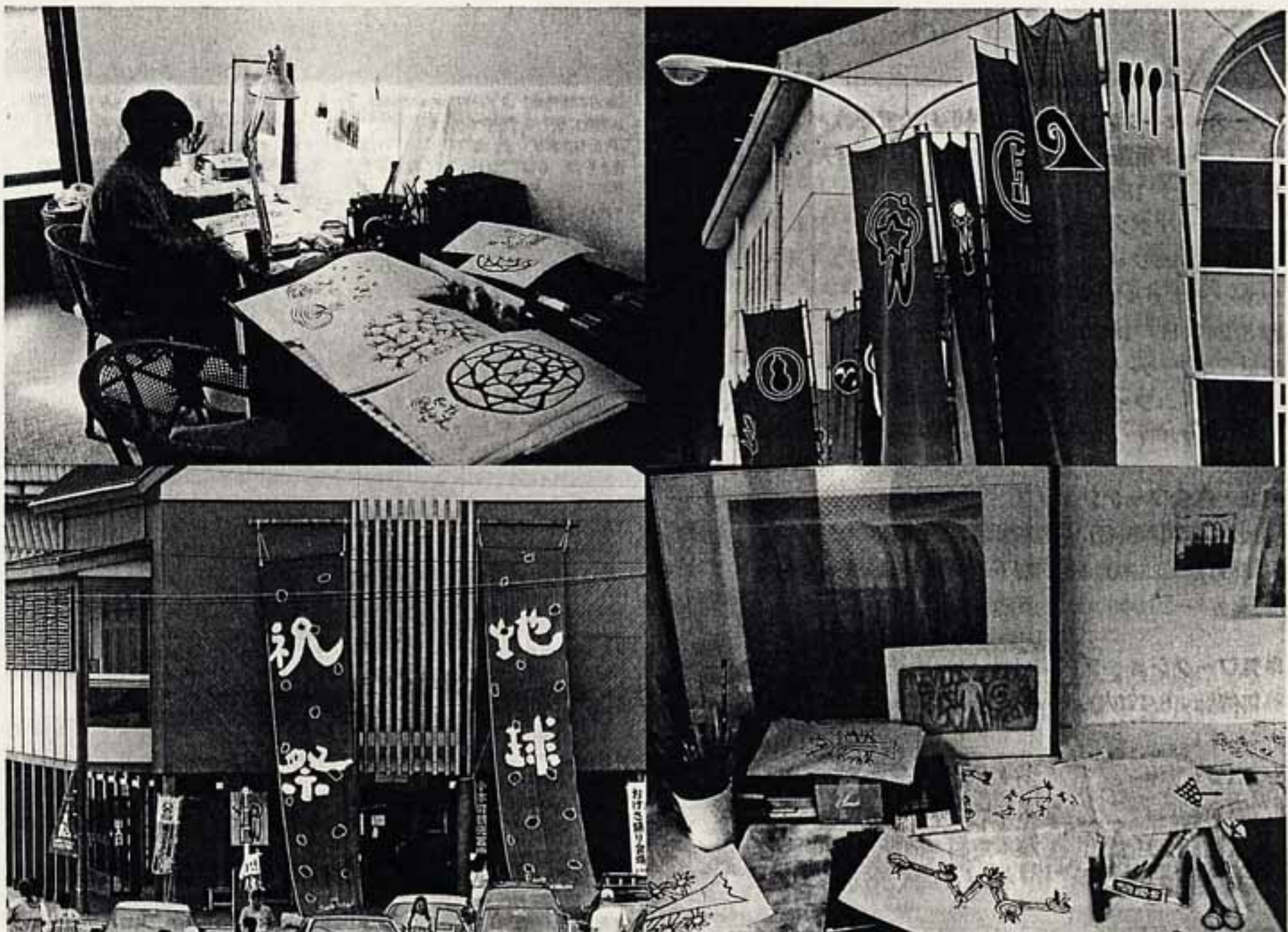
☆二本を九月にお出しになるんですね。

★たぶんアリス・セレブレーションにも間に合うと思います。タイトルは「HOLY QUEST」。副題が「個人的神話探し」。基本的に水彩画で、一つの絵に一つの詩がつい

ている詩画集のようになっていっているんですけども、そこに紀行文も付けようと思つていて。最初はインドやバリ、ここは自分が最初に自分の神話的などところと出会つたという意味でね。その後は僕にとつてはアフリカのドゴン族で、最近この四、五年はインディアンの世界にすごく縁がきちちゃつていて。そういう四つの紀行文を描こうと思つています。

☆さきほどちよつと見せていただいたときに、アリス・セレブレーションでこれまでに使わせていただいたイメージが入つていづれしく思つたんですけれども。読んでみると、どこかの架空の民族の神話の本を読んでいるような気持ちになりますね。

★結局自分の中の神話であるつていうか。ジョーゼフ・キャンベルの「神話の力」つていう本にあるんですけど、神話的世界というのは植物でいうと根つこで、それがなると人間はエネルギーを絶対持てない。人間つて民族や文化ごとに神話を持っていただけけれど、今は混じつたりとかして、一つの文化の中に住んでいない過渡期でしょ？ 僕らはもはや日本神話の中に住んでいないわけですよ。アメリカの集団神話はケネディの葬式で終わったとジョーゼフ・キャンベルは言つているんだけど、終わったその後「栄養」が貰えないわけだから個人個人が神話を探し始める。そこにアフリカの神話が出てきたり、ヒンドゥの神話が出てきたり。エネルギーをそこに求めると自分の中にそれに対応する何かがあつて、インディアン神話とか、日本神話だけじゃなくつて、神話が今度は逆に自分の中で発見されてくるわけです。皆そうだ



と思うんですけども、僕はアーティストとして自分なりの一つの感じたものを形にするっていう作業に興味があるんです。

大きく括ると、そういうことをやっているんじゃないかなと思うんです。ECの仕事っていうのは、毎年毎年何日までっていう枠の中で自分の中のサインを搾り出すわけじゃないですか。それで集団の意識の中で共有されて存在していくわけでしょう？そういう意味でありがたい仕事だなと思っ

☆ECで将来こんなことをやって欲しいということがありますらお聞かせください。

★アメリカンインディアンの「チャンティング」※注。アース・セレブレーションの意味が、とてもベーシックに伝わってくるものだと思うんだけど。インディアンがチャンティングする時っていうのは太鼓の皮が空と地面に向かっていて、叩くのは皆でリズムっていつでもアンサンブルもないし、皆で同じビートになるわけです。一人ちょっと違うビートだったりすると「ミュートされちゃうんですよ。それが叩いていると段々同じリズムになってくるわけです。そうしているとテンポが変わるのも全員同じになっちゃうんです。それを中心にしてシャカシャカ振る人がいたり、踊る人がいたりっていう。パウワウ※注を見てると、地面と空に向かって皮が揺れて、地面のエネルギーを噴水みたいに吹きださせるみたいな感じがするのね。実際そういう中に入っていくと、本当に地面のエネルギーを出しているんだなあと感じるがします。大太鼓とは対極にあるんだと思うんだよね。太鼓を片や水平にして、片や垂直に

して沢山の人で叩くっていう。で、その共演を観てみたいですね。

※チャンティング…北米インディアンの、万物とコミュニケーションするための祈りの唄と太鼓。

※パウワウ…チャンティングによる儀式。

※今年のアース・セレブレーションのビジュアルは来月同封のチラシで「ご覧ください」。

(一九九七年三月十七日、神奈川・葉山の自宅アトリイにて/聞き手:西田太郎/会場の写真:坂口正光、吉田勲)

真砂秀朗/まさご・ひであき

世界各地のネイティブカルチャーへの旅の中で出会った楽器を演奏しつつ独自の音楽を創作し、同時にヴィジュアルアートの分野で活動をしているアーティスト。

一九五二年生まれ。東京芸術大学デザイン科を卒業後、アートディレクション、イラストレーション、絵本の制作にたずさわる。八八年より民族音楽を中心とした音楽活動を開始。九二年チャコキヤニオンをはじめアメリカ南西部への旅の中で深い内面からの感銘を受け、以後毎年アメリカインディアンの聖地に旅を重ね、九五年CD「Out of Journey」をリリース、インディアン・ランドの印象を表現する音と絵の個展「たまたうた」を開催。インディアン・フルートを中心にしたライブ活動など、気持ち良い波動が伝わる絵や音を通じてのアーティスト活動を行なっている。新しいCD「PLANET LOVE」は六月リリース予定(お問い合わせ:AWAレコード/Tel03-3588-1626)

アース・セレブレーション'97

真砂秀朗版画展「Earth Celebration」

会期:一九九七年八月二〇日(木)~二四日(日)

会場:鼓童村・和泉邸/開館時間は来月号同封のチラシで「ご確認ください」。